

【実践事例（3）】

（宮城県涌谷高等学校）

タイムラインで、大雨の際の避難等を検討（広域からの通学者が多い学校）

学校の状況

- 同校は、高台に位置し、学校が所在する涌谷町のハザードマップにおいて、大雨での洪水等による浸水想定地域に該当しておらず、町の地域防災計画においても、要配慮者利用施設に指定されていない。
- 学校の周辺は、広い地域で江合川等からの浸水が想定されている。
- 同校の生徒は、町外の広域から通学している生徒が多いため、大雨により登下校時にも被害に合わないよう、近年の大雨による災害の激甚化を踏まえ、どのような気象情報や避難情報等を収集し、どのタイミングで生徒の安全確保を図るかなどについて検討を進めていく必要性があることから、今回の取組に至った。

取組方法

- 1 同校の防災体制の中心を担う同校の教頭、総務部長、防災主任が、専門家（学校防災アドバイザー）を招き、タイムラインの手法を取り入れた台風接近時等における大雨への対応について、助言を受けた。
- 2 同校では、事前に、町のハザードマップにおいて、大雨での洪水による浸水エリアを確認するとともに、同校が洪水時には町の避難場所になっていることを確認したほか、気象情報や避難情報、川の水位などをどこから収集すれば良いかを確認し、これらを基に、タイムラインの手法を取り入れた対応案を作成した。
- 3 専門家からは、台風接近時だけでなく、前線の活発化による大雨への対応も考慮した対応を検討すべきなどの助言を受けた。
- 4 今後、専門家の助言を基に、防災マニュアルの台風接近時等における大雨への対応を見直し、生徒や保護者、さらには、地域や近隣の学校とも共通理解を図っていく。

